
魔法使いと風精霊

田中 2 3 号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いと風精霊

【Nコード】

N5884Z

【作者名】

田中23号

【あらすじ】

趣味は剣と弓と錬金、特技は魔力節約、最終学歴は王都魔道学院卒業。そんな魔法使いと、インチキ魔法で契約した高位精霊の物語。魔法使いと精霊がイチャイチャしたりしなかったりします。

プロローグ

木々に囲まれた街道に行く男が一人、のんびりと歩いている。

その静寂を破る言葉が響く。

「おい、お前！荷物と腰の剣をおいていきな！」

賊が3人道を塞ぐ。

しかし、道に行く男は止まらず進む。

「と、止まらないと切るぞ！」

賊は動揺しつつも男を威嚇する。

しかし男は止まらない。

「「「うおおお！」「」」

そして、とうとう賊は一斉に男に襲い掛かる。

それに対して男は腰の剣を抜かずに、手を賊に突き出して短く言葉をつむぐ。

「風よ、突き進め」

瞬間突風が吹き荒れ、賊はまとめて吹き飛ばされ、木々に打ちつけられ、昏倒する。

そして男は、何事も無かったかかのように、また歩き出した。

「俺、かつこよくね？」

第一話「魔法使いと精霊の関係」

先ほど、賊を倒した男、名をクリスと言う。

今クリスは、生まれ故郷へ続く道を歩いてる。

「かつこよさで言えば、29点ですね。ぎりぎり赤点。主の学院でのテストの平均点よりはましですね」

「な、なんだと……。俺のかつこよさも精霊にはつたわらんか……。嘆かわしいなあ。あとテストの点は言わないで……」

「精霊に伝わらないというか、人間にも伝わってなかったじゃないですか、可哀想な主、学院の創立記念パーティーも一人で……。あとテストが近づくと意味もなく掃除したり、趣味の錬金したりしてるから赤点なんですよ」

「あああああ！やめて、僕の心の柔らかいところを言葉のナイフで決らないで！！あとテスト前にいつも二番目の趣味に走ってしまうのは病気なんだよ！なぜか一番目は気が引けてやれないんだ」

「まったく。そもそも主は格好つけずに、口を閉じていれば外見も悪くないのに。勉強もやればできるんですから。まあ、卒業できたのでよしとしましょう」

「フウリは俺の母親か！」

クリスと話しているのは、彼と契約した風の精霊、フウリだ。

「ほぼ無償で面倒を見ているという点では、母親と言ってもいいかもしれませんね」

「あはい。本当にすみません。未熟者で。けど、普通フウリ級の精霊と直で契約結ぶのは人間的にきついんですよねー」

「クリスは、魔力節約の鬼ですが、魔力自体は一般人に毛が生えたくらいですからね。まあ、あなたの魔法は面白いので、契約に不満はありませんがね。本当に良く考え付きましたね、契約に節約魔法を組み込んで、精霊の魔力消費を抑えるなんて」

普通、精霊は魔力のある所にいて、上位の精霊ほど魔力の多い所にいる。

契約するためには、場所から精霊が受けている魔力以上の魔力を契約者が提供しないといけない。

精霊が合意すれば、魔力が少なくても契約できるが、その分精霊の格はおちる。

しかし、クリスは得意の節約魔法を契約魔法に組み込んでフウリに使い、提供する魔力は少ないのにフウリの格を落とさないという、半ば詐欺のような方法でフウリと契約している。

「いや、本当にできると思わなかった。内容を理解して契約してくれる精霊となると高位精霊だからな、下手したら不興かって死んだな！」

「私は大らかな精霊ですからね。有難く思ってくれていいですよ。そして余剰魔力を私に渡していいですよ？」

「ば、馬鹿言うな。余剰なんてあるわけないだろおお！いくら節約してるからって、あんた自分の格を考えろよ！！ほとんど限界値の魔力を提供してるんですだよ！？俺に干乾びろって言うのか！」

「うふふ、そんなこと言つて。私知ってるんですよ」

「何をしってるんだ、性悪精霊！」

「まあ、性悪だなんて。ただ、前に拾った魔力を吸い取る指輪に、卒業試験前に錬金を繰り返して、吸った魔力を蓄積できるようにしたでしょう？今主がつけてる指輪、おいしそうですね？」

精霊が人間と契約するメリットとして、人間の魔力は世界に漂っている魔力より、人間の感覚で言えば、美味しいのである。

「勘弁してください。ほんと。自分の使える魔力ほとんどないんです。塵もかき集めないと、錬金も満足にできない可哀想な魔法使いになってしまいます。どうかこの指輪だけは・・・！」

「あらあら、仕方ない主ですねー」

「ありがとうございやす、ありがとうございやす！この恩は魔力量向上魔法ができたらお返しいたしますので」

「そもそもこの面白い契約は、その魔法を完成させるために精霊の魔力取り込みの仕組みを研究するためでしたね」

精霊は無意識に世界から魔力を吸収して段々と格を上げ、取り込める魔力も増えていく。

人間は魔力を少しずつ取り込み、上限まで溜め込んだら、なんらかの形で放出するまでは魔力を取り込まない。

、
クリスは、体に取り込む上限を精霊のように増やしていけないかと思ったのである。

「けど、なかなか研究も進まないまま卒業しちゃったからなあ」

「向こうでは、引く手数多でしたし、宮廷魔法院にも内々に推薦をもらってましたのにね」

「勘弁してくれ。あんなギスギスした職場。推薦貰った日にそれまで話したことない貴族がどの派閥に入れとか、半ば脅し気味に言ってくるんだぜ。ハニートラップでもあるし、女性不信ですよ俺は」

「なら、あのままギルドで遺跡に潜っててもよかったじゃないですか。あと主は女性不信になっても意味がないでしょう、周りに元々いないんですから」

「あれはあくまでお小遣い稼ぎなの、なんでもかんでも師匠に面倒みてもらうわけにもいかないでしょ。あと推薦蹴ったら、女性どころか野郎もいなくなりました」

「一生の仕事にするには、リスクですからね、あの仕事も。まあ、他にもいろいろあったと思いますが、推薦蹴ったらそっちもなくなりましたよね」

「上に睨まれるとやばいってのは知ってたつもりだけど、平民にできる想像のさらに上のやばさだったんだよ!」

国の魔法関係の最高権力は、もちろん宮廷魔法院である。

「お陰で魔法学院卒業で無職ですからね、主。」

「先生たちの哀れみの目線が今でもトラウマです」

「私もひそかに哀れんでました」

「泣くぞー!!」

「はいはい、落ち着いてください、主。お師匠さまのところのは何で蹴ったんですか。いいと思うんですけどね、学院教師も」

「それこそ、師匠に迷惑かかるっしょ。宮廷魔法院に睨まれてる小僧なんぞが入ったら」

「迷惑かけるのはいまさらじゃないですかー。気に入らない貴族のお坊ちゃんをハメたときも、お小遣い稼ぎがばれたときも、お城に忍び込んだときも、推薦蹴ったときも、他にもいろいろ全部、後始末してくれたのはお師匠さまじゃないですか」

クリスの師匠は、魔法の名門貴族の家柄なのでいろいろなところに顔が利く。

「今思うと、学院で無茶苦茶してたから、学院でほとんど人がよってこなかったんじゃない」

「それはそうでしょう。拳句に私のような高位精霊連れてますからね、怖がられますよ。テストの点があれでも」

「お、俺の青春が……。もう少しおとなしくしていればよかったのかああ!!」

「主がおとなしくとか、無理がありますよ。まあ、けど、男友達なら結構いたじゃないですか」

「あいつらほとんど彼女やら許婚やらいたからなあ。友情より女を選びやがって……」

「それでパーティーではほとんど一人ぼっちでしたよね。だからってパーティー会場を事前に爆破しようとするのはどうかと思いますけど」

爆破は、土壇場で裏切り者が出て、未遂に終わった。

しかし、この計画への男性参加者が多く、学院ではそういった生徒への配慮も考えるようになったとか。

「嫉妬の炎が俺を狂わせるんだ……。あれは予想以上に人も集まって引けなくなったのもあるけどな」

「嫉妬するくらいなら、彼女を作ればよかったじゃないですか」

「簡単に作れるならそうしてるよ!!」

「主に気のある人もいたじゃないですか、あのショートヘアの金髪碧眼で、炎魔法が得意で、精霊とも契約してた……。ような？」

「あいつの精霊はお前に怯えて、俺の前じゃほとんど出てこなかつ

たからな」

フウリは上位精霊の中でも最上位に位置されるほど高位な風精霊のため、中位、下位精霊は一緒の空間にいてもその影響をもろに受け、風と相反する土属性の精霊は消してしまうこともある。

「あと、あいつは男だ!!」

「え？」

「え？」

「まあ、主がそう言うならいいです」

「なんだその引つかかるいい方！」

「気にしないで下さい、ところで主の生まれ故郷はまだですか？」

「なんと強引な話題変換。あと少し、この森越えればすぐ着くからおとなしくしてるんだぞ」

「なら飛んで行きましょうよ、主！」

「うーん、そうするか。そんな距離ないしな、森を突っ切ろう」

風精霊が契約者を飛ばしても、魔力はほとんどかからない上に、節約魔法で皆無とっていいほどの消費なので、節約の鬼であるクリスもフウリの提案に乗る。

クリスがどんどん浮き上がり。

そして、村まであと少し。

第二話「魔法使いの過去と白い風」

「よっと」

村の少し前で、ふわりと地面に降り立つクリス。

「浮いて村まで行けばよかったじゃないですか」

「おばか！そんなこと田舎の村でやったら、僕が村で浮いてしまうだろう！」

「何をいまさら。主は浮くの得意じゃないですか」

「学院でも好きで浮いてたんじゃないだよ！？」

「学院でも・・・？ああ、村でも浮いていたんですか」

「決らないでください・・・」

「そつえば、主の昔話を聞いた事がないですね」

「え、なに？聞きたい？」

「期待をこめた目で見ないでください。想像つくのでいいです」

「ひどくね？仮にも主だよ俺？」

「主は勘違いしていますね。そもそも人と精霊の契約は対等です、そして主のした契約ですと、私の方が若干上になります。主を主と

呼ぶのはただの趣味です、別に他の呼び方もできるんですよ、無職主。分かりましたか？」

クリスは契約魔法を弄る代わりに、クリスの魔力をフウリが好きに使っていいという条件をつけている。

ちなみに、フウリとの契約の維持でほとんどクリスの魔力はないのだが……

「え、あ、はい、すみませんフウリ様。お願いですから無職呼ばわりはやめてください、お願いしますお願いします」

「仕方ない主ですね」

「ありがとうございます。これからも誠心誠意フウリ様に尽くさせていただきますとも！」

「その意気ですよ主」

フウリが胸を反らして尊大に告げる。

ちなみに、フウリは今人型である。

精霊は、格が上がってくると段々人型をとれるようになる。

大きさも、人間大から手のひらサイズまで変えることができる。

フウリ並になると、服なども魔力で形成できる。

「まあ、主の過去は特技から推察できます。弓が得意なのは、森で

狩猟をしていたからでしょう？」

「うん、畑耕すより向いてたみたいだから、狩のときはいつもついていった」

「で、剣が上手いのは騎士に憧れたからでしょう？王都でもすれ違つと目を輝かせて見てましたからね」

「あはい、ちゃんばらごつこで磨きました」

「ちゃんばらごつこであそこまでの腕になるのですか、さすが主。変なところで突きぬけてますね」

「あれ、褒められた・・・？」

「褒めてますよ、えらいえらい。それで、どうせ騎士になるんだーとか言っていていつも木の棒でも振り回して大きくなって、本当に王都まで行っちゃったんですね。可哀想に・・・。それは村でも浮きますよ」

現実を見ないといけませんよ、とフウリが続ける。

「あ、当たってる・・・剣買う余裕なんてなかったんだよ！木の棒で悪いか！」

「悪くは無いですけど、本当に木の棒で王都に行っただんですか・・・。ここ数日通った道、結構魔物いましたよね？」

「え、うん。木の棒で頑張った。で、王都目前で力尽きたところを、遺跡の研究に出てた師匠に拾われた」

「本当に馬鹿で可愛いですね主」

「やめて、生暖かい眼差しを送らないで・・・！」

「おっと、そろそろ村に着きますね。私はさつきから何か良からぬ気配がするので、ちょっと周辺の格の高い精霊に挨拶してきます」

「お、おい、なんだ良からぬ気配って。やばいのは嫌だからな！」

「主のやばいの基準が分かりません。遺跡であつた亡霊騎士はやばいに入りますか？」

「おいおい、あれはやばいってレベルじゃないだろ・・・。フウリと俺の剣技とこの剣があつて五分五分だったやないかい！・・・え、あれレベルの良からぬ気配なの？」

以前クリスが、師匠の手伝いで手付かずの遺跡に入ったときに、最下層で王の墓の守人の成れの果てである亡霊に襲われ、遺跡が崩壊寸前になるまで戦って、やっと倒したという事があつた。

ちなみにクリスの剣は、王都の古びた武器屋に行ったとき、小汚い樽に十把一絡げで売っていたものだが、魔力の流れがおかしいことに気づいたクリスがとりあえず購入した。

そして遺跡マニアで古代魔法の数少ない使い手である師匠に見せたところ、古代の魔法文字が特殊な方法で刻まれており、解読できない部分も多かったが、できた部分をあわせると、

世界の魔力を吸引して吸引した分だけ切れ味がよくなり、斬撃を飛ばすことができるようになる、ということが発覚したので、ボロボ

口だったのをクリスが得意の錬金で見栄えと、剣そのものの切れ味をよくしたものである。所持者の魔力を吸ってなんらかの効果を得る魔剣というのは存在するが、世界の魔力を吸って効果を得る魔剣というのは大変珍しいものである。

あと、魔法使いが武器屋に行くことなど滅多に無いのだが、クリスが自由にすることができるとお金を得て初めていったのが武器屋だ。木の棒を振り回すのは恥ずかしいということに、王都に来て少ししてやっと自覚したそうだ。

「そうですね、あれ並なら主の腕も上がってるし、剣の魔力も満ちてるのでそこまで苦戦しないと思うのですが」

「超不安です。師匠に連絡いれたほうがいいかな」

「王都出て一週間で、ですか？」

「は、恥ずかしい。師匠泣いて見送ってくれたのに。ちょっと俺には無理だわ」

「まあ、様子見だけでもしてきます。処理できそうなら処理しますし」

「うーい。お願いします」

「はい、お願いされました。それでは、危なくなるかもしれないので、少し頂きますね？」

「頂くって何・・・を!？」

クリスの唇にフウリのそれが重なる。

「ん……。ごちそうさまでした」

「おいましてその色情精霊」

「勘違いしないでください主。別に主に好意を持つての行動ではないですよ？ただ、魔力を頂いただけです」

「そんなことは分かってるわ！だけど別にその方法じゃなくてもいいだろ！？」

「はて？その方法とは？」

「い、いや、だから、き、き、キスじゃなくてもだな！」

「うふふ、純情ですね可愛い主。けど、これが効率いいんですよ、私にとっては」

「う、うそくさい。しかも指輪から魔力無くなってるんだけど、ねえ、なんでなんだよフウリイイイ！指輪から取るなら俺に接触しなくてもいいだろうが！！」

「それでは見てきますので、おとなしくしてるんですよ主。あんまり騒いだと、ほら村の人も変な目で見てますよ」

「スルーするな！！お前のせいだ！！早く行って来い！！怪我すん

なよ!~!」

「はい、それではまた後ほど」

そう言いつと、フウリの体がふわりと浮いて段々遠ざかっていった。

「ふう、白……か……」

第三話「魔法使いは初代騎士団長」

けしからんフウリを見送ったクリスは、村の前まで足を運ぶ。

「お、おい、お前！さっきから一人で大声だしたりしやがって！怪しい奴は村には入れないぞ！」

ちょうど村の前で遊んでいた少年たちが声を上げる。

精霊は基本、ある程度魔力を扱える者にしか見えない。

よって、フウリと話しているクリスは独り言を言ってるように見えるため、学院外でもあまり人がよりつかなかった。

フウリ並の高位精霊なら、人に姿を見せることも簡単なのだが・・・。

「怪しいだと！こんなシテイボーイの俺を捕まえて怪しいだと！この田舎者が！お前じゃ話にならん！村長を呼べい！」

「ふ、ふざけやがって！このー！」

「おれたちになうと思うなよ！」

「ぼっこぼこにしてやんよ！」

「僕たちはトリエ村騎士団だぞ！」

「けどあの剣本物じゃない？やばくない？」

「ばっか、どうせ偽物だって」

「金持ちそうな顔じゃないだろ」

等々、少年たちは木の棒を振り上げて威嚇する。

「木の棒・・・それにトリエ村騎士団だと・・・くそ！なんてことだ。俺の負けだ・・・。好きにしろ・・・」

少年たちが振り上げる木の棒を見て、がくりと膝をつくクリス。

ちなみに、トリエ村初代騎士団長はいま膝についている。

「分かればいいんだ！」

「けどこの怪しい奴どうする？」

「自警団の兄ちゃんたちのところに連れてく？」

「兄ちゃんたち、村長の家に集まってたよな」

「よし！ついて来い！村長の家に行くぞ！」

結局、クリスは村の中に入れることになったようだ。

「よし、お前はここで待ってるよ！今兄ちゃんたち呼んでくるから」

そう言い残して子供たちは村長の家に入っていく。

「お前ら、何しに来た！今日は大事な話してるから、村の外で遊んでろって言っただろ！」

「ちがうんだよ兄ちゃん」

「怪しい奴を村の外で見つけたんだ！」

「それでみんなで捕まえて連れてきたんだよ！」

「凄いだろ！」

と、子供たちが自慢していたところに雷が一発入る。

「お前たちは！！また、そんな勝手なことして！！何度言えば分かるんだ！！村のお客さんかもしれないだろ！！それに本当に危ない奴だったら最悪死んでしまうかもしれないんだぞ！！」

実際、一度旅の商人を捕まえて、こっぴどく怒られているトリエ村騎士団員は顔を青くしたり、泣いてる子もいる。

「とにかく、その人のところにすぐ案内しろ！」

「う、うん。村長の家の前にいるよ」

「わしも行こう」

村長も立ち上がって家を出る。

自然、集まっていた大人が全員ついて行く事になる。

「おお！あなたが、うちの子供たちがいたずらしてしまった人かな？」

「あーそうですね、たぶん。きっと」

「ふむ。まことに申し訳ない。この通りじゃ！」

「本当にすまない！」

そつ口々に言って皆が頭を下げる。

「あの、そのですね、気にして無いというか、遠く巡って俺のせいというか……」

止められるのも無視して村を出た身であり、その後連絡もしなかった身であり、初代トリエ村騎士団長という身でもあるので、クリスのほつも気が気じゃない。

「おお！そう言ってくれますか！」

村長がぱつと顔を上げて喜び、頭を下げてた村の大人も顔を上げる。

「……あれ？」

「お？」

「んー？」

「おい」

落ち着いて見ると、村の闖入者がどう見ても見知った顔であることに皆が気づいてくる。

「お前、クリスじゃねえか！」

「おい、クリ坊か！」

「おおー、本当だ」

「人違いです」

即否定するも、皆聞く耳を持たない。

「心配させやがって！」

「生きてたのか」

「勝手に出て行きやがって！」

「マリアンさんもジョシュもずっと心配してたんだぞ！」

マリアンとはクリスの母の名前で、ジョシュは弟の名前である。

「俺も心配してたんだぜ、団長！ププッ」

「なんだ、初代じゃないか、頭下げて損したぜ」

初代団長時代の5年ほど前は、村の客人を罨に掛けたりと、もつとひどかった。

団長は年下の団員をこき使って、村の周りに罨を仕掛けまくっていた。

「お前の仕掛けた罨にはまって、一週間臭いがとれなかったんだぞおお！」

「で、騎士にはなれたのか？」

「なれてたらここにいないべ」

「結局戻ってきたのか」

「まあ、いま大変だし、若い働き手は居て困るもんでもないしな」

「てめえ、貸してた色本返せや！」

「お前が出ていってからリリィちゃんが元気なかったんだからなあああ！」

「くそ、もげろ！」

等々、熱烈な歓迎を受けるクリス。

そこに、後ろから声が掛かる。

「クリス！！！」

マリアンが大声でクリスの名前を呼び、駆け寄ってくる。

そしてその勢いのまま、あつい抱擁・・・タックルを繰り出す！
倒れたクリスに馬乗りになって殴るマリアン。

「このっ！馬鹿息子がっっ！」

「おご、ちょ、あば、母、あが」

「おいおい、そんなにすると死んでしまうぞマリアン」

村長が見かねて止めに入る。

「チツ。命拾いしたわね！」

「それが息子に向けて言う言葉か！！」

「うるさい、馬鹿息子！5年も連絡なしで！どんだけ心配したと思っ
ってんの！」

マリアンが涙目で怒鳴る。

「あー、いや。すみませんでした！」

クリスは勢いよく頭を下げる。

「もういいわ。殴ってすつきりしたし。ジョシュ置いて戻ってき
ちゃったから、とりあえず家で待ちましょ」

「はいさ」

「皆もお騒がせしてごめんなさいね。この馬鹿息子には、今度日を改めてちゃんと村長のところに挨拶させにいきますので」

「よいよい。積もる話もあるじゃろつて」

「さすが村長だぜ。あと村長の息子よ、色本は犠牲になったのだ」

「お、俺のお気に入りがあああああああ」

晴れ渡った故郷の空に次期村長の絶叫がこだまするのだった。

第四話「魔法使いと母と弟」

「うおおお、帰ったぞおお」

「うるさいわね、お帰りなさい」

クリスは家に入るなり騒ぎだす。

「我が家はいいね、一番だね！王都なんてほこりっぽいし、それに比べてこの村はなんて清々しいんだ」

クリスはテーブルについてくつろぎ、マリアンはお茶を入れて戻ってくる。

「あんた、王都にいたのかい」

「うん。騎士になるつもりだったからね」

クリスはお茶を飲みつつ答える。

「うそおっしゃい。あんたが何で家を出たかなんてこっちはお見通しよ」

「う、嘘じゃねーし！騎士になるつもりだったし！」

「あの年は、ウルバが死んでから初めての不作だったかね。本当ならジョシュをどこかに奉公に出さないといけなかったのを知って、出て行ったんでしょ」

ウルバとはクリスの父、マリ안의夫である。

「う……。ま、まあ、それが関係してないといったら嘘になるけど、本当にそれだけじゃなくて、騎士になりたいってのも理由だったし。そもそも、ジョシユのほうが俺より何倍も畑仕事できるからね」

「はあ。あんたが納得してるならいいけど、母としては複雑だね。今からでもジョシユと土地半分ずつとかしない？」

「そんな慣習作ると村の人たちに睨まれるからやめとくよ。ジョシユは家の農地をちゃんと相続したんでしょ？」

「ぐずったけど、村長にも話して、ちゃんと相続させたわよ。村長もうすうすあんたが出て行った理由気づいてたみたいだけど黙っててくれてね。ジョシユは年齢的にはちよつと早かったけど、体でかいし体力あるから大丈夫だろうって、村のみんなも説得してくれたわ」

「ああ。ジョシユはでかかったからなあ」

「あれからもっと大きくなつたわ」

「え！？何食ったらそんなにでかくなるんだよ！」

「あんたと同じ物食べさせてたんだけどねえ」

「身長の格差社会や！」

「主もそこまで小さくはないでしょう」

「弟より小さいだけで俺のプライドはズタボロなんだよ・・・」

「主のプライド・・・？ああ、あれですか、遺跡でよく捨ててますよね」

「プライドなんて遺跡じゃ邪魔なだけだよな」

「さすが主です。早さに自信のある私も、あんな見事な逃げっぷりは真似できません」

「毎度毎度挟り込むように言葉の暴力を振るってくるな・・・ってあれ？」

「どうしました、主？」

「何、さも当然のように会話に混じってるの」

「やっと気づきましたか、鈍いですね主。それだから、女性との出会いも見逃すんですよ」

「最近、フウリの罵倒に慣れてきた自分が怖い」

「変態主ですね、無職と並べるともう手の施し様がないですね、ご愁傷さまです」

「えーっと、馬鹿息子。そこの綺麗なお嬢さんはだれだい？！」

突然現れた美女に驚いて、固まっていたマリアンが再起動してクリスを問いたです。

「これはこれは。挨拶が遅れまして、大変失礼いたしました。私、主と契約させていただいております、フウリと申します。未熟な身ではありますが、誠心誠意クリスマス様に尽くしていきますので、どうかよろしくお願い致します」

「ちょ、馬鹿！フウリ！大事なところが抜けてるよ！？」

「何が大事なところよ！馬鹿息子！都会に行って帰ってきたと思ったら、こんな別嬪さんと契約して主とはどういう見だい！もう少しお仕置きが必要なようね！表に出な！」

「勘弁してくれえええええ」

「ふむ、大事なところですか、主・・・ああ！そうですね、誤解を招いてしまいました。失礼しました。主とは契約してますが、ほとんど対価も頂いておりますよ」

「違うよおおお！？そうだけど、違うよおおお！！？」

「あ、あんたって子は・・・！そんなことする子じゃないと思ってただけどねええ！？都会に行って根性が腐っちゃったのかね！」

「おいしいいい！信じてくれよ母さん！ってか、フウリも悪ふざけが過ぎるって！」

「ふむ、すみません、主。お母様も途中から気づいてるようでしたので、少し悪乗りしてしまいました」

「母さんもぐるかあああああ！」

「ふふふ、あんた中々面白い娘さんを連れてかえってきたじゃないのさ」

「主をからかうのは私の趣味ですので」

「ここに味方はいないのかああああ!!」

「そんなことより、この娘さんとはどんな関係なんだい？」

「そんなことつて軽く流さないで・・・」

「私は主と契約した精霊兼嫁です。お義母さま、これからよろしく
お願い致します」

「あら!まあまあ!こちらこそこんな馬鹿息子ですが、可愛い
ところもあるので、見捨てないでやってくださいね」

「おいしい!精霊が嫁とか聞いた事ねえよ!?そんな契約してない
からね!？」

騒いでいると、玄関が開く音と共にどたと慌てたような足音が
響く。

「母さん!兄さんが帰ってきてる本当!？」

「本当よ、ほらここに」

マリアンがクリスを指差すと、クリスの弟、ジョシュがクリスを口
ツクオンする。

そして一息に間合いを詰めると、クリスを力一杯抱擁する。

「兄さんっつ！生きててよかったよおお」

「ああ、心配掛けたなって痛い痛い、馬鹿、絞めすぎだああああ」

「にゝいゝさゝんゝ」

「聞いてねええ！おいまじで体格差考えろおおお！ギブ！ギ・・・
ブ・・・」

段々、動かなくなっていくクリス。

「こら。ジョシュ、クリスがぐったりしてるから離しな！」

「うあああ、ごめんよ兄さん！嬉しくてつい」

「はあはあ。殺す気か！」

「ごめんよお」

「ああもつわかったから涙目になるな鬱陶しい」

「うん・・・」

しゅんとなるジョシュ。

それを見て、クリスはため息をつきつつ、ジョシュの頭を撫でる。

「すまんかったな、家のこと全部任せちゃって」

「に、兄さん！そんな、僕のほうこそ！」

「ああまた抱き着こうとするな」

「う、ごめんなさい」

「はいはい、もういいから、とりあえず畑仕事の泥落としてこいよ」

「うん、洗ってくる」

そっいつて、ジヨシユは家の裏の井戸へ向かう。

「相変わらずだなあ、あいつは」

「あんたが出て行った理由も、最近気づいたみたいでね、少し落ち込んだのよ、あれでも」

「主が家を出た理由ですか？騎士になるためでは？」

「あら、お嫁さんにも何も話していないなんて、いけない子だわね、あんたは」

「おいちよつとまってください、嫁じゃねーですよこいつは」

「また、そんな照れちゃって。こんな息子だけど結構家族思いなのよ、家を出た理由だって本当は」

「おおおっと、そこまでだぜお母様」

「主は黙っていつも通り壁の花になっていてください」

「ひどいわ！パーティーでもいつの間にか壁際に移動してる俺に向かつて！」

「で、あの子が家を出た理由なんだけどね・・・って理由なのよ」

「まあ、主は家族思いなんですネ、そういえば学院でも女の子に言い寄ってた貴族に・・・それで・・・あれで・・・」

「キャッキャッ」「ウフフ」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ 弟が戻るまで、部屋の隅でいじけている魔法使いの姿があったとか・

第五話「魔法使いとドラゴン？」

話をしていたら、いい時間になったので、マリアンが夕飯を作り、皆で食卓を囲む。

「で、兄さん、フウリさんとの関係は良く分かったんだけど、結局五年も何してたの？」

夕飯を食べながら、ジョシュがクリスに尋ねる。

ちなみに、精霊であるフウリは特に食べ物を食べる必要はないのだが、少しは食物の魔力を取り込むことができるから、という言い訳でクリスが同席を求める事が多かったため、最近では魔力以外にちゃんと味を感じることができるようになった。

クリスとしては、一人で食べるの寂しいというのが本音である。

「王都の魔法学院で学生してました。超優等生だったんだぜ」

「さすが、兄さんだね！」

ジョシュは、昔から兄の言うことを無条件で信じるのである。

「本当に、さすがですな主」

「あ、やめて。ごめん、嘘だから。実は卒業もぎりぎりでした」

「あんたは昔から、ジョシュを騙し切ったことはないわよねえ」

ジヨシユの純真無垢な瞳に弱いクリス、嘘をついても結局嘘だと言うか、その嘘を真実にしてしまう。

「くそ！そこはいつもなら、フウリが痛烈なツツコミをするところなのに、俺の弱点を的確に突いてくるなんて・・・いつも通りか」

「平常運転です」

「本当に仲がいいんだね、二人は」

「夫婦ですから」

「夫婦じゃない！」

「主従と言ったほうがよろしいですか？主」

「え、あ、うん。そう言われると、契約内容があれだし、ちょっと困っちゃうわ」

「父親に似て煮え切らない男だね、あんたも！ちゃんと責任とりな！」

「おおおい！？責任ってなんだよおお」

「主、契りまで交わしたのに、そんな・・・」

「までやこら！契りって契約だろが！なんか変なふうに聞こえるから！ただの、魔法使いと精霊の契約だろ！」

「あはは、まあまあ。兄さんも熱くならないで。フウリさんも兄さ

んをあんまりいじめないでね？」

フウリがクリスをいじって、マリアンが煽って、クリスが爆発して、ジヨシュが宥めるローテーションで食事の時間が過ぎていく。

「結局、あんたは冒険者しつつ学生してたのかい？」

「うん、学生が本業で、冒険者はお小遣い稼ぎだね」

「なら、兄さん魔法も使えるんだ！すごいなあ」

「あんた、あんまり危ないことはするんじゃないよ？冒険者なんて乱暴者も多いって言うし」

「大丈夫です、お義母さま。主は、剣と弓の腕では冒険者ギルドでも一目置かれ、難易度高い討伐も何度かこなしていて、そっち関係ではかなり有名人です。逆に、魔法使いと言ってもだれも信じてくれませんが」

「そつえばこの子、昔から木の棒で魔物しばき倒してたからねえ」

「兄さん強いもんねえ」

「しみじみこつちみないでくれますか！？魔法使いなんだよ！一応！ギルドの登録も魔法使いなのに、それっぽい依頼一度も受けた事ないけど！！フウリと契約してからは、本当に全然使って無いから腕が落ちてないか超心配だけど！」

実際、鍊金以外の魔法はフウリ任せが多く、クリスはギルドだとドラゴンキラーの称号を持っているため、凄腕剣士として扱われてお

り、魔法は、使えるらしい？くらいにしか思われていない。

ちなみにドラゴンキラーは、ドラゴンを討伐したときに国から与えられる称号だが、国の騎士はほとんどもっている。

騎士団のドラゴン討伐ほど醜い狩は無いと言われているが・・・

参加すれば何人で倒しても貰えるため、騎士の虚栄心を満たすものというのが一般の認識となっている。

しかし冒険者でもっていると、その冒険者の実力を示すものとしてぐんと価値があがる。

「そういえば、騎士団からお誘い受けてたのに、何でそっちに行かなかったんですか？」

「うん？だってお前、魔術学院入れてもらったのに、卒業して騎士団入りしましたとか滑稽だろ！師匠にも顔向けできないし！あと実際見た騎士団はちょっとなあ」

「あのお師匠さまなら、笑って許してくれそうですけどね。逆に無職のほうが心配してると思いますよ。まあ、主が騎士団入るって言うてたら実家に帰ってましたけど」

「師匠には心配掛けてばかりだなあ、今度遺跡潜って、また貢物でも献上するか。あとお前の実家と言えばあの空の島か、さすがにもう行きたくないぞ・・・」

クリスとフウリが話している横では、マリアンとジョシュが呆れ顔だ。

「あんた、本当に危ないことは程々にしなさいよ」

「兄さん、ダメだよ、危ないことは。兄さんが怪我したりしたら悲しむ人がいるんだからね」

「あはい、すみません、気をつけます」

兄が落ち込んだことを感じて、ジョシュが明るく言う。

「けど、兄さんの冒険の話聞きたいなー」

それに喜ぶクリス。

「そうかそうか！じゃあまずは、国境付近で暴れてたドラゴンを退治した話をしよう！あのときは本当に大変だった、敵国の軍隊まで出張ってきて」

「そして、敵国の軍隊がドラゴンを切り倒す主を見て、逃げ出して行きましたよね。おかげで今、相手の国とは停戦交渉中です」

「いや俺のせいじゃないだろ、停戦交渉は」

「いえ、聞いた話だと、あのときの軍隊に敵国の王子がいたらしく、帰って早々見てきたことを報告したら、王様が泡を食って停戦を要請したらしいですよ」

「だからか、なんかあの依頼以降、国からおいしい仕事が・・・」

報酬のほとんどは、クリスの師匠への貢物や、錬金の素材で消えて

いる。

「お師匠さまが名前とかは隠してくれたみたいですけどね、ギルドも主には借りがありますから、しっかり情報統制してくれたみたいですよ」

「なるほどなー。しかし、なんで俺の知らないことをフウリが知ってるのか、とても疑問なんだけど」

「気にしないでください、趣味の範囲です」

「多趣味な精霊だなおい！」

マリアンとジョシュは呆然と二人の話を聞いている。

「兄さん・・・戦場に行ったの？」

ジョシュが心配そうに言う。

「あんた、ほんと無茶ばかりだね・・・」

マリアンが、呆れ切った顔をする。

「俺ですが、家族の視線が痛いです」

「ドラゴンなんて序の口じゃないですか」

「おいやめろ、もう少し刺激の少ない話をしよう」

「じゃあ、騎士団を闇討ちした話ですか？」

「過激すぎるだろ!!」

「そもそも、刺激が少ない話が出てこない件。人間相手な分、騎士団闘討ちが一番刺激が少ないですよ」

「おいしい、あるだろなんか！俺も思いつかないけど！ああ！あれだ。王城忍び込んだときのやつ！あれなら特に問題ないだろ！」

「王様に一撃いれたあれですね」

「あ、ごめん、やつぱなし」

「あああああ、あんた！そんなことしたのかい！？」

「兄さんそれはさすがにまずいんじゃない?」

「おいしいいい、違うんだ、俺はやっていないいいいいいいいい」

魔法使いの絶叫が響く中、夕食の時間が過ぎていった。

第六話「魔法使いの剣の秘密」

「くそ、なんだ、この五年！本当にろくなこと無いぞ！」

夕飯を食べ終わって、クリスは五年ぶりの自分の部屋でごろごろしている。

「私との出会いをお話すればよかったのでは」

ふわふわ浮きつつ、フウリが言う。

「・・・！あれならちゃんと冒険してるし、別になんか倒した話じゃないし、とっても食卓向けの話だったんじゃない？なんで早く言わないし！」

「ええ、そうですね、すみません。あの島に来るのに遺跡一個無くなってますけど、一番まとまな話ですよ」

「ああ・・・嫌な・・・事故だったね・・・」

「お師匠さまが涙目だったじゃないですか」

「やめて、あの顔思い出すと今でも罪悪感がひしひしと！」

「ダメな主ですね」

ベットに顔を埋めているクリスを見ながらフウリが続ける。

「ところで、あの良からぬ気配についてですが」

「おお、そういえば何か分かったのかい！」

「ええ。ちょっとやばいことになってます」

「え。なにそれこわい。亡霊はもう勘弁」

「私は亡霊のほうはまだいいですけどね」

「お、おい、やめてくれよ。亡霊のほうがましって、もう俺個人でどうにか出来るレベルじゃなくね!？」

「落ち着いてください、主。大丈夫です、私にとっては都合の悪い相手なだけで、主なら一刀両断です」

「一応魔法使いなんだけどね俺。まあ倒せるならなんでもいいや・
」

「さすが主。それでそのやばい奴なんですが・・・魔力食いです」

沈黙が部屋を支配する。

「・・・・。oooooooooooo、まじもんでやばいやないかあ
あああああ！」

魔力食いとは、その名の通り魔力を食べる、魔物の突然変異である。

魔力食いは、世界から一切の魔力を吸収できず、そのため、生物がもっている魔力を食べて力をつける、特に精霊が好物で、精霊食いとまで言われる。実際、精霊食いというのは別にいるのだが、人間

から見た被害はどちらも天災レベルなのであまり区別されない。

どちらも、放置して精霊を食べつくされてしまうと、不毛の大地が
できあがる。

「まだそこまで精霊も食べられていないそうなので、明日にでも倒
しにいきましょう」

「え、倒せるのあれ。くそ珍しいし、俺見たことも無いんだけども」

「主の剣なら、切れ味抜群ですよ。切ればあいつの魔力も吸って切
れ味がドン！更にドン！切り刻みましょう」

「フウリさんテンションおかしくね？そもそもうちの剣、他の生物
の魔力吸えたっけ？」

「いやですね、主。私はいつも通りですよ。ただちよっと同族が食
べられてイライラしてるだけです。あと、主の魔剣はそもそも主の
魔力を吸うこともできますよ？ただ、主が素寒貧だから世界の魔法
を吸ってるだけです。切れば生物の魔力も吸収します。だからドラ
ゴン切ったとき切れ味やばくなっただじゃないですか。本当にあの
大さのドラゴンを一刀両断するなんて、そりゃ停戦したくもなりま
すよ」

「ああ、怒ってるのね。まあ、俺もむかつくし、切ろうか。ってか、
この魔剣すごかったんだな……。てつきりちよっと珍しいだけか
とおもってたわ。ごめんよ」

「明日、切り刻みましょう。というか、魔剣については、私より長
い相棒なんですから、正確に把握してあげてください」

「はい、すみません。けど、刻まれた古代魔法文字は難解すぎて、師匠だつて解明できないところ多いし！剣振つてるときは、切れ味増したなあと思うことはあったけど、俺の隠された力がピンチで覚醒したんだなつてくらいにしか思つて無かったです、すみません。」

「てつきり知ってるものかと思つてましたが。主に隠された力は一切ないので安心してください。ピンチになつても、魔剣にあげれるほど魔力もないですしね」

「ぐぬぬ。指輪の魔力もまた集めなおしだし、つてか結局魔力使つたの？」

「ああ、主に接吻して頂いた魔力ですね、ちゃんと使いましたよ、半分食われて消滅しかかつてた精霊に」

「接吻つて……。まあ使つたならいいや」

「ふふ、赤くなつて可愛い主」

「おい、やめろ、くつついてくるな」

「しかたないじゃないですかー、あるじのへや、ベットいつこしかないですしー」

「棒読みはやめろ！別に浮いたまま寝れるだろうが！そもそも睡眠いらないだろ！」

「まあまあ、主。長旅で疲れているんです。接触してれば効率的に魔力を摂取できますし、主の節約にもなるでしょ？」

一応、契約して魔力を渡している場合、契約者と非契約者が離れていると、到達するまでに微弱な魔力が世界に放出されている、と言われている。

「くっ・・・分かったよ。もう寝よう」

「はい、主。おやすみなさい」

「おやすみ。フウリ」

・ ・ ・ ・ ・

「（ちくそう！柔らかいものが当たって寝れない！！）」

翌朝。

「結局ほとんど寝れなかった・・・」

クリスは隈ができた顔でベットから出て顔を洗いに行く。

「主、寝不足ですか？ いけませんよ、素人ではないのですから、戦いの前に夜更かしなんて」

「お前のせいなんだよ！？」

「ふむ。刺激が強すぎましたか」

「狙ってやるなよおおお」

クリスとフウリはいい合いしつつ食卓へ。

「おはよう母さん」

「おはようございます、お義母さま」

「はい、二人ともおはよう」

クリスは、大きな弟の姿が見えないことに気づいて母に尋ねる。

「あれ、ジョシュは？」

「もう畑にいったわ」

「うお、早いな」

「あの子、お兄ちゃんがいつ帰ってきてもいいように頑張ってたのさ」

「ったく、あいつは・・・」

「ふふふ、いい弟さんですね、主」

「うつさい」

マリアンが微笑ましそうに二人を見る。

「ほら早く食べちゃいな」

「ういーす。いただきます」

「いただきます」

「私もそろそろジョシユの所に行くから。あんたは村長に話をしなきゃ。あとリリイにも顔見せに行くんだよ、あの子はあんたのことすごい心配してくれてたんだから」

リリイとはクリスの幼馴染で、何かと変わっていたクリスの面倒を良く見てくれていた。

「あいあい。そのあと少し森のほうに行くからー」

「森のほうは、今危ないからやめときな。なんか見た事もない魔物が出るらしいから。そのせいで、昨日も村長の家に獵師とか自警団が集まってたんだよ」

「なるほど。まだ食われた人とかいない？」

マリアンがクリスを鋭く睨む。

「食われた人はいないけど・・・あれは人を食うのかい？というか、

あんだあれの正体がわかるのかい？」

「あ、あはは。ちょっとやっかいな魔物だけど、何度か倒したことあるから、今日にでも始末してきちゃうよ。村の人が食われたら嫌だからね」

「危ないことはしないで欲しいんだけどねえ。まあ、あんだがそう言うなら信じるわよ。そのこと、村長には言っていきなよ」

「りょーかいしました、まっかせといてよ！」

「はいはい、それじゃ行ってくるからね。怪我するんじゃないよ」

「いつてらっさいー」

「いつてらっさいませ」

マリアンを見送ったクリスとフウリは、食事を済ませ、支度をする。

「魔剣つて、切った奴の魔力も吸収できるんだよなあ……。これ応用できれば、魔力の上限を増やせなくても、吸収速度をアップできそうだなあ。うーん、取り込む術式に節約魔法を織り交ぜて、小さい作用で大きい魔力を得れるように……。まずは魔剣を改造して……。」

「主、考えるのもいいですが、早くあいつを切りに行きましょう」

「あ、はいはい、大分怒ってるね」

「ええ、同族を食べられて黙ってはられません。昨日助けた精霊

も手助けしてくれるらしいです。火精霊で、魔力食いに棲家の洞窟を奪われたらしいです。私、火精霊とは相性いいので、丸焼きにして切り刻みましょう」

「怖いよ!？」

「ところで、さっきさりと嘘ついてましたね」

「倒したことがあるくらい言わないと、心配されるだろ」

「そうですね、いい嘘だと思いますよ。馬鹿正直だった主が、ちゃんと嘘もつけるようになってうれしいです」

「へいへい。んじゃ行こうかね」

「まずは、村長さんのところでしたね」

そうして、魔法使いは家を出たのだった。

第七話「魔法使いと魔力食い」

フウリを待たせて、村長の家の玄関をまたぐ。

「ちわー」

「挨拶くらいちゃんとせんか！」

いつも集会をしている部屋にクリスが行くと、昨日とほぼ同じ面子が集まっていた。

「すみません。それで、村長。昨日は言いそびれましたが、少しの間村に滞在したいのですが、よろしいですか？」

「う、うむ。それは問題ないが。敬語を使われるのも、ちとむず痒いのお。というか、滞在なのか？住まないのか？」

「ええ。王都の学校を卒業したので、家族の様子を見に帰えってきた次第です。少ししたら王都に戻ろうと思います」

途端、ざわめきが広がる。

「王都の学校だと！」

「嘘だろ・・・」

「木の棒しか持たないで出て行ったって話なのに」

「王都の学校で雑用してただけなんじゃ」

「俺の色本・・・」

村長が一喝する。

「静まらんか！」

すぐに静寂が戻る。

「して、王都では何を学んだのだ？」

「魔法について少し」

「む、そうなのか、てつきり剣術だと思ってたのだがな、あと喋り方はいつも通りでいいぞ」

「ひゃっほい！敬語とかあんまり使わないから疲れるんだよね！」

クリスは村長の言葉を聞いて、すぐにはっちゃける。

「はぁ、お前という奴は・・・まあいい。お前が望むなら村の空家を貸してもいいから、村に残る気はないか？」

村に魔法使いがいれば、実力なんて無くても、何かと役に立つし、字の読み書きが出来るというだけで貴重なのだ。

「うーん、まだやり残した研究もあるし、王都の師匠にも恩返ししたいしねー。けど、ちよくちよく帰ってくるよ」

「そうか、残念だが、仕方ないか」

「すみません」

「よいよい。ところで他の者には挨拶してきたのか？リリイは特に心配しておったんだぞ？」

「このあと行つて来るよ」

「ふむ、この時間なら、皆畑だな。ちゃんと顔を見せてこいよ」

「はい。あ、それと村長、森になんかいるじゃん？あれの件なんだけど・・・」

クリスが本題に入ろうとしたところで、部屋のドアが開く。

「村長！大変です！」

件のリリイの妹、ユリイが息せき切って入ってくる。

「どうした、ユリイ！？」

「ね、姉さんが、森に入った子供たちを追って森に！」

集まっていた村人が騒ぎ出す。

子供たちとは、騎士団の面々である。

「子供っていうとあの悪ガキどもか！」

「な！森は今やべえんだぞ！」

「化け物がうついてんだ！」

「すぐ呼び戻しにいかないと」

「けど、魔物だって何体も食い殺されてるんだぞ、俺たちで行っても・・・」

「おい！子供を見捨てるってのか！」

村長が立ち上がる。

「静まれ！」

「だけど、村長！」

「おぬしら騒いでも仕方ないだろう！すぐに若いもん集めて森に行くぞ」

「あ、村長」

クリスが声を上げる。

「クリス、今状況を説明している暇がないんだが、森と一緒に来てくれんか？」

「ああ、森に行くのはいいんだけど。先に行くから、村の人は森の入り口で待っててもらえないかな」

「おい、何言ってるんだ！今、森には化け物が！」

「正体も分かつてるから。ちゃちゃっと倒しちゃうからさ。森の入り口で子供たちを頼むわ」

「しかしな！」

言い募る村人を押し戻して、村長が決断する。

「分かった。子供たちとリリイを頼む」

「村長！？」

「クリスの弓の腕は、おぬしらも知ってるだろう。魔法も使えるんだ。わしらがいても邪魔なのだろう」

「村長がそう言うなら・・・」

村人たちは村長の説得にしぶしぶ引き下がる。

「そんじゃ行つて来る」

クリスはそう言うとか何か呟き、瞬間村長らの目の前から掻き消えた。

フウリは、村娘が村長の家に駆け込んだとき、クリスに契約を通して話かけていた。

『主、何やら慌しくそちらに向かった娘がいましたよ』

『うん、今ちょうど来たね』

少し途切れてから、クリスが慌てて言う。

『まずい！子供が森に入ってそれを追って娘も一人入ったらしい！』

『森は魔力食いの狩場になってますから、危険ですね』

『すぐ追いつくから、先に行って子供たちを探してくれ』

『分かりました』

フウリは浮き上がると、急いで森に向かう。

フウリは森に着くと、昨日助けた火精霊の戦っている気配がすることに気づく。

『主、昨日助けた精霊が戦っているようです。たぶん相手は魔力食いですね。人の気配もします』

『すぐ行ってくれ、俺もフウリを目印に向かう』

『分かりました』

フウリは戦いの気配がするほうへ急ぐ。

クリスも、フウリの補助が無い中、なけなしの魔力を使い高速で移動する。

「頼むから、無事でいてくれよ!!」

魔法使いは祈り、さらに加速する。

第八話「魔法使いの幼馴染」

火精霊が魔力食いと戦っている後ろで、子供たちが泣きじゃくり、村娘がなんとか子供たちを逃そうとしている姿がフウリの目に入る。

フウリは急降下しつつ、魔力食いに風の刃を無数に叩き込む。

ふわりと、フウリが火精霊の前に降り立ったときには、魔力食いがいたところは、地面が抉れ土煙が立ち込めていた。

「間に合ったようで良かったです。その娘、子供たちは全員いますか？」

村娘、リリイは目の前で起きた事象に一瞬呆然とするも、すぐにフウリの質問に答える。

「は、はい、皆います！」

「それでは、急いで逃げてください。私たちが足止めますので」「土煙がはれてくると、うごめく影が見える。」

「分かりました！ほら、皆立って！逃げるよ！」

しかし、子供たちは泣きじゃくり、なかなか移動しようとしなない。

そして、魔力食いが襲い掛かってくる。

魔力食いは、オークの変異のようだがほとんど原型を留めておらず、

体中から黒い霧のようなものを撒き散らし、腕を振り上げて攻撃してくる。

「く、存外早い攻撃ですね・・・！」

避けると、後ろにいる子供たちに当たってしまったため、避けるわけにも行かず、フウリは魔力食いの攻撃を風で防ぎ、いなしている。

火精霊も隙を突いて攻撃するが、消耗が酷く有効打にならない。

「魔法に対する耐性も半端ないですねえ・・・まあ私は時間稼げばいいので」

そう言いつつ、フウリは突風を起こし魔力食いを吹き飛ばす。

しかし、魔力食いはすぐに木を蹴って戻ってきて、腕を振り下ろし攻撃する。

「守りながら戦うのは久しぶりです。主はあまり守らせてくれませんからね。しかし、もう終わりです」

フウリは魔力食いの攻撃を風で受け流し、体勢が崩れた隙に風の刃を数発叩き込み、足止めする。

瞬間、魔力食いの姿がぶれたかと思うと、真つ二つになり崩れおち、黒い霧となって消えていく。

成り行きを見ていたりリイは何が起きたか理解できなかった。

「遅いです、主。落第点です」

魔力食いの消え去った後にはクリスが立っていた。

「厳しいな！フウリがないし、魔力もろくにならない状態で、こんな急いできたのに！むしろピンチに来て颯爽と悪を倒した白馬の王子さまじゃないか！っていうか本当に切れてびっくりだわ！なんか黒いの出てたけど、呪われないよね！？もう呪いは嫌なんだけど！」

「次からもう少し早く来てください、危うく本気を出すところでした。あと、主の剣なら切れるって言ったじゃないですか。呪いは分かりませんが、魔剣が粗方吸ったようなので、もしかしたら何かあるかもしれないですね。よかったですね、主」

「おいしい、無理無理！魔剣何食ってるのおおお！ダメでしょ！ぺってしなさい！」

剣を振り回すクリス。

そこで、リリイと子供たちに気づき襟を正す。

「ま、まあ、なんにせよ、無事でよかった。皆怪我はないかい？リリイも久しぶりだね？」

クリスはところどころ服がぼろぼろになり、枝が刺さっていたり、顔に傷ができてる。

そんなぼろぼろの状態でリリイに近づくと、キザったらしい笑みを浮かべ手を差し伸べる。

「主、その顔は気に障るのでやめてください」

「おま、気に障るってひどくない!？」

目を白黒させたリリイがやっと答える。

「えっと、その女性が守ってくれたので皆怪我は無いですけど」

そして、落ち着いて助けくれたであろう青年の顔を見る。

「・・・あ、あー！クリス君！あれ！？何でいるの！？帰ってきたの！？その女の人だね！？っていうかさっきの化け物なに！？どうなったの!？」

リリイは村でも元気がよく、その容姿と相まって結構村の男にも人気がある。

「おっと、帰って村長に報告しないと」

しかし、疲れているところでこの質問攻めに答えるのは面倒だとクリスは判断し、踵を返す。

「ちょ、ちょっと待ってよ！置いてかないでよ!」

「後は任せた、フウリ」

「面倒を押し付けしないで下さい」

「め、面倒ってどうゆうこと!？クリス君!」

「俺、ここまで超特急で来て、本当になけなしの魔力まで使っ

らふらなんだよフウリ」

「私も疲れました、帰って寝たいです」

「お前寝ると回復するのか・・・？」

「するわけないじゃないですか、気分です」

「ですよー。んじゃ、二人で帰るか。家まで飛んでく？」

「いいですね。面倒事はいつも後回しにする主のその姿勢、私は好きですよ」

「うがああああ！無視するなー！」

「うがーって年頃の娘が上げる声じゃねえぞ！慎みたまえ！」

「そうですね、うるさいですよ娘。主との癒しの時間を邪魔しないでください」

「ふ、二人してなにさ！そんな怒鳴らなくてもいいじゃん！っていうか説明してよー！」

「俺は毎回あんまり癒されないんだけど、どうなってるの」

「仕方ない主ですね。今度とびっきりの癒しを私が提供しましょう」

「お、なにに？精霊の癒しなんて、俺想像つかないなあ」

「無視しないでよお」

「落ちるのと、上がるの、どっちがいいですか？」

「おいまてや、なんか不吉な感じがするぞ・・・？」

「いえ、ただ急降下するか急上昇するかの違いですよ？どっちもがいいんですか？主も欲張りですね」

「あぶねえよ！？癒されねえよ！？欲張らねえよ！？」

「私はそれをするとう癒されます」

「お願いだから無視しないでえ」

「やっぱり、癒されなくていいわ・・・」

「我がままな主ですね」

「うつ・・・、クリス君が数年ぶりに帰ってきたと思ったら、私を無視して知らない女の人といちゃいちゃしてるううう」

黒い霧が晴れ、森はにぎやかになってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5884z/>

魔法使いと風精霊

2011年12月21日01時57分発行